
羊の鎧を着た狼の戦場?

翠色じゃないヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

羊の鎧を着た狼の戦場？

【Nコード】

N22370

【作者名】

翠色じゃないヒスイ

【あらすじ】

反逆者達が、少年達が、元軍人が、奔走する。黒く染まった運命という名の糸に絡め取られ、少しずつ引きずり込まれてゆく。覆い隠されたこの世界の真実から、彼らは己の信念を貫いた選択を進む。それが正しいことなのか、間違ったことなのかさえ分からぬまま。国を違えながらも平和を望む反逆者。新たな敵を前に我が子を想う父親。死が渦巻く戦場で足掻き続ける少年。しかし、思惑は三者三様あれど願いはひとつ——世界のために。少年と様々な仲間達が繰り広げる、ちよっとハードボイルドで戦記なSFアクション。

第一部 始動！

B F O ・ 反逆の狼煙

暗闇の中、リズム良くハイヒールが床を叩く音が響く。

コツ、コツと、同じ場所を何度も回り続ける。執拗な、苛立ちさえ含んだ負の残響音。

部屋は異様に蒸し暑く、格子の嵌^{はま}った窓が一つだけ光を取り込んでいる。空気が澱んで見える。

「そろそろ、答えたらどう？　優しく聞いてあげるのは、ここまでよ」

窓から差し込む光が、薄い褐色の肌を映し出す。ライトブラウンの髪を団子状に結って、広がった黒い虹彩に眼鏡を重ねた、スーツ姿の——一見キャリアウーマンとも思える女性。額に薄っすらと汗を滲ませながらも、その毅然とした表情はかわらない。

厳しい表情で、椅子に座った——座らされた、四十代前後の男に話しかける。男は両腕を椅子の背もたれに縛り付けられ、猿轡を噛まされた状態でもがき続けている。

何も答えようとしらない理由を思い出し、ようやく女性は破顔して馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに笑う。

「ああ、ごめんなさい。それじゃあ喋れないわね」

唾液に濡れ、汗を吸い込んだ猿轡を外し、床に放り捨てた。

「さて、聞かせて貰おうかしら？」

「はあ、はあ……。こんなことをしても、どうにもならんぞ。もう準備は整っているんだ。明後日にもなれば、一つの街が減び、再び我々の時代が来る。お前らに止める術はガッ……」

無駄な口を叩く男の髪を鷲掴みにして、勢い良く首を後ろに逸らせる。首の痛みに悶える男のことなど気にしない。

「ねえ、何か勘違いしていない？」

話しかける声は優しく、しかしその表情は悪魔にも似た形相。

「出来るか、出来ないのか、を聞いてるんじゃないの。どこにある

のか、を聞いているのよ。言葉も分からなくなった？ それとも、共通言語で聞いてあげましょうか？」

「ぐ、うう……。だ、第三区西方独立地域だ。そこで、二日後に会合が行われる。たぶん、目的のモノも持ってくるだろう。喋ったぞ、もう見逃してくれッ」

苦痛の所為か、途切れ途切れに言葉を紡ぎ、男が懇願する。

調べが足らなかったとは言え、目的の場所を出入りするのを尾行して、こうして捉えてきた。少し前から尋問を繰り返し、ようやく心身共に疲弊したのか口を開いてくれた。

だが、まだ聞くべきことはある。

「馬鹿言ってるんじゃないわ。当日の見張りや、建物の間取りは？ 洗い浚い、知ってることを話さない。そうすれば、解放してあげる。良い、洗い浚いよ。集まる奴らの人数まで、全部よッ！」

今度は顎を掴み上げて、揺りながら尋問する。自分らしくないほど焦っているが、残りの時間が二日と聞かされれば誰しも慌てるだろう。

なにせ、これから起ころうとしていることは、彼女達だけの問題に留まらず世界を巻き込むようなことだ。

「無理を言っ……。俺は、単なるボディガードとして雇われただけだ」

「はあ。役に立たないわね。とりあえず、見張りは何人ぐらい居そうなの？」

ボディガードがこの様では、目的のものの見張りも大したことは無さそうに思える。

「十数人の各ゲストに、一人か二人、多ければ三人程度のボディガードが付く。後は、外の見張りに西方の警備部隊が数人だ」

態となのか、それとも本当に知らないのか、アバウトな答えだ。纏めると、四、五十人の見張りがいると考えれば良さそうだが、それもまた多いように思える。

いや、守るものがものである以上、それも当然なのか。

「仕方ないわね。こうなったら正面突破は諦めて、奇襲で行くしかないわね。まあ、あの人もどちらかと言うとそっちのほうが得意だろうし」

「おい、独りで解決しないでくれ。早く解放しろッ」

男が喚く。

煩わしい。

だが、約束は約束だ。

「ごめんなさい。約束通り、解放してあげる——」

折りたたみナイフを手に、男が座る椅子の後ろへ回りこむ。

ただ、解放するとは言ったが、五体満足に帰すとは言っていない。だから、女性は事実としては約束を反故にした。

「——この苦しみから、ね」

ゆっくりと男の首筋に移動させたナイフで、一気に頸動脈を？き切る。

蚊の鳴くような、小さな呻きを漏らす。

女性の怒りを体現したかのような赤い噴水が、闇の中の壁を、唯一の光を見出すガラスを、赤に染めて行く。

いつから、彼女の心はこれほどまでに荒んでしまったのだろう。

最愛の人物は自分の行を許してくれるのか。いや、許してくれない。自問自答する。

「……………」

人を殺したという感慨さえなく、女性は部屋の扉を開く。

滔々と流れ込む陽光に、思わず腕で顔を覆ってしまう。

寒風が吹き荒ぶ。冬用の服とは言え、スーツとアンダーウェアだけではさすがに寒い。

身を震えさせながら降り立ったのは、十二月にもなるうかという小さな下町の一角だ。機工屋や薄汚れた飯屋の建ち並ぶ工場町。先刻まで居た部屋は、部屋とは呼べない無機質なキャンピングトレーラーの一室である。

「お嬢さん」

道路に下りたところで、唐突にしわがれた声で巨漢が話しかけてきた。

自分のことだと気付くと、女性はゆっくりと巨漢の方を振り向く。
『レッド・カウ』と銘打たれた看板の下で、油に汚れた熊の如きスキンヘッドの男が困ったような表情をしている。

「店の前に止められると困るんだが……。それと、手に塗料が付いているよ」

言われてみて、手に目をやれば確かに返り血が付着していた。

ただ、巨漢は血だとは思っていないらしい。トレーラーの後ろに止められている、真紅の塗料に染められたスポーツカーのものと、勘違いしているのだ。

「まあ、直ぐに客が来るわけじゃねえんだがよ。もしどこか擦ったって言うなら、家で塗ってやつても良いんだが」

「いえ、お構いなく」

下町の荒んだ温かみというのか、迷惑ながらも手を貸そうという男の言葉を断る。

女性はポケットから取り出したハンカチで血を拭い、早々にスポーツカーへと乗り込む。

「そ、そうかい……。はは、上さんがいなかったら、思わず口説いていたところだ。でも、どっかで見たような？」

巨漢のその声を最後に、ローから始まったギアをセカンド、トツプへと切り替えて走り去った。向かうのは、ここから少し離れた住宅街だ。

B F O ・ 反逆の狼煙（後書き）

いきなり人死にとか、言い訳のしようがない……。とりあえず、恒例のラジオコーナーは次回ということで。

これからもお楽しみいただければ幸いです。

BF1・叛逆者の誘い

呼び鈴が鳴ったのは、キッチンへ飲み物を取りに来た帰りだった。トレーに、オレンジジュースを注いだ四つのグラスを載せ、ゆっくりと歩いていた。そんな時に、何の変哲もなく——誠、普通に——呼び鈴が騒いだ所為でトレーを落としそうになる。

「あ、わ、わわわわっと……」

浮きかけた利き足をどうにか踏み込み、トレーの上で揺れるオレンジジュースを制動させる。三つほど入った氷が、グラスにぶつかって心地良い音を鳴らす。

落とさずに済んだことに安堵して、

「はッ、はいッ？」

慌ててトレーを机に置き玄関へと急ぐ。

黒のロングヘアーを揺らしながら、扉を開く。そこに佇んでいた、褐色の肌をしたキャリアウーマン然とした美女を、漆黒の双眸が見据える。

あまりの美しさに思わず息を吞んでしまったが、努めて平静を装って言葉を紡ぐ。

「えっと、どちら様ですか？」

「あ、あの……尋ねておいて申し訳ないのだけど、貴女は？」

どうも、少女——ローナが出たことに女性も驚いているようだ。

「すみません、私はローナ・エルセントと言います。この家の家主

——ソルフさんの息子さんの、と……友達です」

そのまま言い切ることを躊躇いながらも、ローナは自己紹介しておく。躊躇うも何も、自分は本当に友達なのだから問題はない。いや、友達で留まっているからこそ問題がある。

それはさておき、この美女は何者なのだろうか。ローナ自身は知らないが、もしかしたら家主ことソルフ・セイプの知り合いかも知れない。ならば、その息子——正しくは養子——であるウィンディ

「セ이프の知り合いである可能性も高い。

故に礼儀正しく振舞う。

美女からは莊嚴な雰囲気さえ漂いながら、お偉いさんのように威張った様子はない。見た目の年齢からも、ソルフより若い。

「そうなの。ソルフさんはいらっしゃいますか？」

ローナの自己紹介に、女性は些か安堵したような表情を作る。

たぶん、息子が居ることは知っていたが、ローナが出てくるとは思っていなかったのだろう。

「直ぐにウィンディ君を呼んできますかニヤッ……！」

踵を返そうとして、ローナは見事に相変わらずのドジを披露してしまう。濃緑のスカートが大きく傘を開き、一瞬だけ薄桃色の布切れが顔を覗かせる。

「だ、大丈夫……？」

玄関マットでスケートボードをしたローナに、二種類の声が掛けられる。

一つは、訪問者である女性のもの。もう一つは、呼び鈴に気付いてやってきた少年の声だ。少年こそがウィンディ「セ이프」である。

この家の、現在、実質的な管理権限を持つのはウィンディということになるだろう。

白に近い灰色の長い目に伸ばした髪を揺らし、どこか弱々しささえ感じさせる鳶色の瞳で見据えてくる。いや、これでも出会った頃よりも凛々しくなっている——と思うのはローナだけか。

「は、はいッ……。こ、これぐらい、なんともありませんよ。うんッ」

呆然と見詰めてくる女性など目に入っておらず、慌てて飛び起きながら取り繕うローナ。

ウィンディに恥ずかしいところを見られて、自分でも顔が紅潮しているのが分かる。まあ、それはそれとして、ローナは女性との会話をウィンディに譲る。

「ソルフさんにお客さんです。ウィンディ君のお知り合いですか？」

尋ねてみるが、ウィンディの表情はそれを否定していた。

「どちら様でしょうか？　もしかして、軍部の方、ですか？」

「いえ、個人的な知り合いです。ただ、急ぎの用事があるのだけど、お父さんはいらっしゃる？」

「申し訳ありません、態々お越しいただいたのに……父は今、用事で出かけています。たぶん、後、二、三日は戻らないと思います」

そう、ソルフは、軍人だった頃の知り合いに頼まれて出かけている。

どういう用事かまではウィンディも聞いていないらしく、帰宅の日程を伝えられないまま昨日から留守にしていた。

それを聞いて、女性の顔は美貌を失う程に歪んだ。急な用事というのは嘘ではないらしい。ただ、流石にその顔のままでいるわけもなく、直ぐに表情を戻してウィンディに向き直る。

「どこに行くのかも、伝えてくれてないんですよねえ。電話先も……緊急の時は、私がお隣さんに頼ってくれ、って言ってたぐらいですから」

現状の解決は見込めないことを、追い討ちと分かっているもローナが付け加える。

そこへ、なんの脈絡も一人の男がやってくる。

「なんだ、お客さんか。正直、フィル嬢と二人きりなんていうのは勘弁してくれ」

ウェーブのかかったロン毛に無精髭を生やした、少し老け顔の男だ。老け顔とはいったものの、ウィンディとローナより一つ年上なだけで、まだ十七歳だ。

名前をオスカル・ゴードンと言い、もう一人の友人——フィルレイと部屋に籠っていることが苦になって出てきたのだろう。「あら、お友達？　ごめんなさいね、お邪魔してしまって。仕方ないので、また出直します」

他にも友達が来ていることに気付いた美女は、申し訳無さそうに言っただけ立ち去ろうとする。その姿に、あざとくもオスカルが気付い

てしまう。

「むッ。貴女は――」

美女と知り合いなのか、オスカル表情が神妙なぐらいに曇る。

「な、何か……？」

上から下まで値踏みするように視線で舐めまわすオスカルに、流石の美女も異質なものを感じたのか半歩ほど身を引いた。

「なんという美人さんだぁッ」

「はっ……？」

唐突に、オスカルが美女の手を握ったため、彼女は困惑した声を出す。

「これはまさに運命ッ。貴女のような美女に出会えた偶然を、ここで更に育みましょうッ！」

更にズズッと美女に顔を寄せていくオスカル。

「はい、そこまでですよ」

最後は、ローナがオスカルの襟首を引っ張って引き剥がす。

美女を見ればしきりなく口説くオスカルに、些か呆れを覚え始めるローナ。ある意味で、こうも自分の欲望に正直なオスカルが羨ましい。

なぜローナやオスカルが、ウィンディの家にいるのかと言うと。単に、数日の留守に暇を持て余したウィンディに招かれたからだ。

「今度は、私一人を呼んで……ゴニョ、ゴニョ」

思わず口から漏れかけた欲望を濁し、ローナはそそくさとオスカルの部屋奥へ連れ戻す。

「ローナ……貴女に任せておいて文句を言うつもりはないけど、頼んだものぐらいいは届けてから他の仕事をしてくれないかしら？　なんだか、喉が渴いて仕方ないのよ」

気だるくも遠く通る声で、愚痴を口にしながら顔を出した四人目の来訪者。

「あッ、ごめんなさい、フィルちゃん」

「おっと、レイ家のご令嬢がお怒りだぞ、ウィンディ」

フルネームをフィルティア・レイと言い、本人はローナのふざけた愛称を嫌っている。が、ほとんど仲間内では定着している。

ただ、言われてみると、今回の訪問で一番に注文をつけているのは彼女だった。こうした場面において、オスカル辺りが色々と場を仕切るかと思っていたが、ローナの予想に反して飲み物を注文したのはフィルティアである。

しかし、友人の家に招かれてまでダンマリを続けられてもウィンディとしても遣り難かろう。

一様に濃緑の制服に身を包んだ、学校の友人達。

フィルティアにしてみれば些か遺憾だろうが、これが残りの二年と数ヶ月を一心同体として過ごす『Wolf』のメンバーである。ちなみに、『Wolf』というメンバーの名称は、数か月前の新入生クラス分け試験において、模擬戦へ挑むにあたって付けられたチーム名だ。名前の由来を言えば、メンバー四人の名前の頭文字を並べただけだが。

「……ごめんなさいね、楽しんでるところをお邪魔してしまってお父さんへの話は、先約を入れておかなかった私が悪かったわ」

ウィンディも、指名された父親が居ないのではどうしようもなく仕方なく美女を見送った。

その後は何の滞りもなく時間は進み、楽しいともつまらないとも言えない怠惰な時間が流れる。しかしこの時、偶然の出会いが生み出した運命の糸が、見えないところで少しずつ^{もっ}纏れ始めようなどと今のローナに予想できただろうか。

「それでは、今日はこれで失礼しますね。あッ、それから、明後日は私の誕生日なんですよ。夜の八時から私の家でパーティーをするので、都合が良ければ来てください」

少しあざといか、とも思いつつ、それでも自分の祝日を祝って欲しくて、帰り際にローナはそれを伝えた。

——ただ、そんななんでもない小さな我儕が、大切な友人達の紡いでいた糸を危険な運命に絡めてしまう結果になるなんて、少しも

思っ
てい
ませ
ん
で
し
た。

B F 2・東方からの訪問者（前編）

体に纏わり付くのは、異常なまでに粘度のある暑さ。立ち上る反射熱が全身を包み込み、皮膚を這いずるように湿気が体を苛む。さいな

ハッチング帽に、赤と白の升目模様のシャツと茶色いベスト。紺色のデニムパンツとランニングシューズを身に着けた、登山家を彷彿させる男。若くもなければ、老齡でもない顔立ちだろうか。首には、チェーンに繋がったシルバーアクセサリーが何かを掛けている。荷物は食料品と着替えで膨らんだ大きめのリュックサックぐらいだ。背の低い枯れ草が一带に広がる荒野の、ほとんど整備されていない砂地の道にはそれなりに溶け込んでいた。

男が歩くにつれ、山道と呼べそうな峠道が少しずつ起伏を見せ始める。格好こそ自然であるものの、逆にそんな道を徒歩で進む姿が異質だった。

「はあ、はあ……俺も、衰えたもんだな。迎えぐらい、頼んでおくんだった」

ハッチング帽を外して、愚痴を呟いたのはソルフ・セイプその人だ。

袖手で汗を拭い、帽子を被り直して歩みを進める。久しい運動で体は火照っているのもあるが、やはり南方の暑さを舐めて掛かったのが間違いか。

話を聞く限り、そろそろ目的地が見えてもおかしくはなかった。

ちなみに、ここはソルフの勝手知ったる東方の地ではない。土地勘も、詳しい地図も持たず、ただ耳に叩き込んだきた記憶を頼りに二日間の道程を、愛車のバギーと徒歩で移動しているのだ。第一行政開拓地区と呼ばれていた、西方国家の激戦区である。ジャングルと荒野が隣接する、人間の開拓によって砂漠化が目覚しく見ることのできる地域だった。

「この峠を越えなくちゃならんのか……」

ソルフがばやいた通り、峠を越えた先のジャングルの隣接地点が目的地だ。

ただ、西方国家の激戦区ということもあり、いつどこから銃弾が飛んでくるかも分からない荒野を、なんの防具も付けずに踏破しなければならなかった。

西方と東方の二国に別れ、一時的な停戦こそしているものの小競り合いが続いている。その両国を分ける中心線を『フアルサー・ウォール偽る者の壁』と呼ぶのだが、そこから東西数キロ県内を危険区域に指定し、危険区域内での死亡および負傷に関しては政府からの医療補償を受けない。

その緊迫感は、退役したソルフには久しい。

『壁近くを潜行する歩兵大隊からのヘルプだ。慣れない気候と、マリリアにやられて、指揮能力が低下している。大隊長の代わりに、指揮を執ってきてくれないか？』

懐かしみながらも、二日ほど前にかかって電話の内容を思い出す。軍人時代の知り合いに頼まれ、『偽る者の壁』を越えて西方南下までノコノコとやってきてしまったお人好しの自分が疎ましい。

本来、退役したソルフが別働隊のヘルプに応じる必要はないのだが、人手が足りないことと昔の約束を良いことに、無理やり押し付けられた形でもある。

「しかし、西方の反政府ゲリラに戦略拠点を占拠された。っていうのも、馬鹿な話だよな……」

とんだ体たらくを見せ付けてくれた元同僚達に、呆れて言葉もない。

もし指揮能力が低下した場合、撤退するのが通常の作戦だ。しかし、今回はそうも行かないらしい。

ただの侵略作戦ではなく、重きを置くのは重要な戦略拠点の奪還。一個師団でも投入すれば反政府ゲリラなど子供のような相手だが、それこそ西方国家との火種に油を注ぎかねない。故に、一個大隊の侵攻作戦と見せかけて奪還するという、苦肉の策が提案された。

ただ、そのことに關してはそれほど問題視しない。

一番の問題は、黙って出てきてしまったこと。特に、息子であるウィンディに何も伝えず作戦への参加を決めてしまったことが心残りだった。

原因の根底がウィンディにあるとは言え、その責任を負わせるには辛いものがある。

昔の約束——上層部に掛け合ったウィンディの養子契約——が、まさかこんなところで足枷になるうとは、ソルフ自身も思わなかったのだ。

「さて、どう言い訳したものでかねえ……うん？」

溜息を吐き掛けたところで、少し離れたところに一台のトラックを発見する。ソルフと同じ進行方向に向かって停車している。

道幅いっぱい砂色をした車体。荷台には四角い黒のシートが張ってあり、何を載せているのかは判断できない。

運転席に座るのは恰幅の良い、三十路ぐらいの男だ。慌てて助手席から降りてきた男も、同年代と思いき顔つきだが、些か緊迫した表情をしている。

「おい、早くしろよ。こんな仕事、さっさと終わらせて冷たいビールでも飲もうぜ」

どうやら、何かの運搬作業中に仕事仲間が用を足しているという光景らしい。

通りすがりの農民、という風体ではなく、軍人かゲリラ軍のどちらかだろう。

ソルフは、運転席の男に見つからないようにトラックの真後ろを進む。崖に向かって用を足している男は、陽気に鼻歌を歌っているためこちらに気付かない。

小便男の背後に回り、用を足し終えたところで羽交い絞めにして口を塞ぐ。

「Don't speak (喋るな)」

耳元で囁くように、共通言語で騒がないよう取り付ける。

口を塞いでいた側の手を放し、胸元から取り出したシルバーアクセサリー——ドックタグ——を男の首筋に宛がう。こんな状況でなければ直ぐに見破られてしまうハツタリだが、焦った男にはナイフのような刃物にでも思えるだろう。

「Sey me your belong to organization（どこの所属か答えろ）」

「……命だけは、助けてくれ。東方国家連合軍、第一師団分岐第一大隊、だ」

気が動転してか、男は聞き慣れた東方言語で所属を口にした。それを聞いて、ソルフは慌てて男を放す。

「こいつは申し訳ない。念を入れたのが仇になったなあ……。すまない、俺はあんたらのヘルプで呼ばれたソルフ・セイプだ。所属は、元第一師団の師団長。階級は少佐だが、今回は中尉権限を与えられている」

下手に騒がれるよりも早く、ソルフが正体を明かす。

「……ああッ。こ、これはお見苦しいところをお見せしましたッ。第一大隊所属、階級は一等兵、名前はヘンゼル（Hanseel）。ヘンゼル——」

「——畏まった口調は勘弁してくれ。何処の所属だろうと、俺の前では気軽に話して欲しい。これが俺の指揮下に付く条件だ」

ソルフが臨時の上官であることを知り、慌てて名乗るヘンゼル一等兵。運転席の同僚は、ハーバー（Herbar）という。階級は同じくして一等兵だ。

とりあえず、畏まった口調に対しては未だに鳥肌が立つようで、友人が軽い敬語までの話し方を約束として取り付ける。誰の呼び名も、ファーストネームで呼び合うことも、約束の一つだった。

こうして、とりあえず東方軍のベースキャンプまでの足を手に入れた。

「なあ、別に俺は荷台でも良かったんだが……？」

「あ、いえ、荷台には荷物がたくさんあります……。るので、落下の可

能性が。怪我をされて、上に文句を言われるのは勘弁です」

ハーバーとヘンゼルに挟まれるよう、車内ですし詰めになったソルフがぼやく。

ヘンゼルの返答も当然だが、倒れる荷物があるぐらいならソルフが支えていても構わない話ではないか。

「それなら、私が荷台に移動します。さすがに、上官にそんな雑務を押し付けるわけには……」

「もう見えてきました。少しでも我慢してください、ソルフ少佐……」

……。ああ、中尉で良いですね？」

逐一、停まって席替えをするのは面倒、とばかりにヘンゼルの提案を却下するハーバー。

「上官思いの下仕官をもって涙がちよちよぎれるよ……」
皮肉を口にする。

二人の下士官には苦笑を返され、ソルフは肩をすくめて見せる。

まあ、彼らが必要以上に気を使うのも無理はない。現在の軍部組織に置いて、元とは言え上級将校という階級は、神にも等しい等級なのである。人的資源のみで戦争をしていたころに比べて、S・Aなる機構装甲の発達が目覚ましい現代では、軍縮による統制士官が大きく変わった。

連隊指揮官止まりだった上級将校でさえ、一個師団を指揮して戦場に出てゆく。連隊から師団までの間にある軍団呼称が廃止されたことに要因があるのだが、それは余談にしか過ぎない。

「さあ、見えてきましたよ」

まだ緊張の解れないハーバーの言葉に、ソルフは小さくため息をついた。

BF2・東方からの訪問者（前編）（後書き）

「どれそれ羊狼ラジオコーナー」

「ええ、長らく更新を滞らせて大変申し訳ありません。久しぶりに顔を出すヒスイです」

「ほんとに、いつまで読者を待たすつもりだ？　今回は俺が活躍するって言うのに……。おっと、名乗り遅れたがソルフ＝セイプとは俺のことさ」

「自身の小説のキャラに怒られるというのは癪だが、読者を待たせたことはアマチュアとて謝罪せねばならんことだろう。さて、謝つてばかりじゃラジオコーナーの意味がないから、少しばかりネタバレと行こうか」

「ほお、珍しいじゃないか。あんたが遠まわしに内容を話すことはあっても、ストレートな物言いはないことじゃないのか？」

「ネタバレと言っても、大したことは言わないぞ。今作に出てくるとある二人組は、羊狼の三作目で主役を務めるという話がしたかっただけだ」

「あれ、それって相当重要な話じゃないか？　今回は敵として出てくるだけだが、四作目へのふくせムグッ……」

「それは言わない約束だろ。さて、少しばかりの補足として、今作では羊狼の世界観をもう少し詳しく説明することが挙げられています。なぜ、元少佐であるソルフが師団長を務められたか、などの疑問は軍オタの方などが抱いているでしょう」

「プハッ……死にかけた。けどよ、軍隊組織の構成は時代や状況に左右されるって分かっているだろうから、深くは突っ込まれなかつたんだよな」

「とりあえず、重要なネタバレになること以外ならば、感想やラジオコーナーで回答していきますので、ビシバシと突っ込んでやってください。作者本人も、考え切れていない部分が少なからずありま

す」

『それでは、今回は謝罪を主体としたコーナーになってしまいました
たが、これからもよろしく願います』

B F 3 ・東方からの訪問者（後編）

ベースキャンプにたどり着いたソルフは、早速——といって言いのか、重い足取りで上官用の天幕へ向かう。

天幕の中に居たのは、数人の男女だった。どれも見慣れない顔で、階級章を確認するだけでも曹長が二人に軍曹が三人だ。

ソルフが入室するなり、五人の顔が一斉にこちらを向く。

「……ソルフ」セイプ中尉、ただいま到着しました！」

驚きながらも、久しく敬礼などやってみる。形が崩れていなければ良いのだが。

「グロウブ（Guloub）曹長です」

敬礼を返しながら、短く刈り上げた黒い髪に黒い瞳、焦げ茶色の肌をした西南系と思しき偉丈夫が名乗る。

「隣がエミーナ（Emiene）曹長」

「宜しく、中尉殿」

金髪のポニーテールを揺らし、黄色の顔の中で切れ長のオッドアイが笑う。

東方中部の出身か、割と好きな美女に敬礼ではなく握手を求められ、戸惑いながらもそれに応える。

見覚えはないというのに、自分との接し方を知っているような態度だ。もしかしたら、大隊の中に知り合いがいるのだろうか。

「フリケットウ（Fulicetto）軍曹……と言います。お見知りおきを」

北東系の白い肌をした、軍人というよりも紳士と言った風体の男が軽い敬礼を見せる。上官への言葉遣いに悩んでいる苦い表情だ。

他の上官達に比べて老齢なのは、警備隊からの叩き上げか、古参の貴族上がりだからだろう。

「アルフォン（Alufon）です。宜しく願います」

こちららも東方中部系の黄色をした若者だった。明朗で快活そうな

声音と表情は、どことなくローナに似ている。もちろん、こちらは男性だが。

「あ、あの……ルエサー……トパーズ・フ……ルエサー衛生軍曹です！」

戦闘には不向きそうな——衛生兵では当然の——弱々しい、東方中部系の丸い顔立ちの女性が恐る恐る挨拶を交わしてくる。赤褐色の髪が異様に栄える、どちらかと言えば可愛らしい部類の女性だ。

フルネームを言いそうになって周囲に倣ったのだろうが、別にフルネームぐらいは聞いておいてもよかった。まあ、一時的な仲間である以上、彼らのチームに深入りするのは止めておく。

「あの、妹から聞いています。生きた伝説のセイプ中尉は、真似しようにも真似することができないとッ」

「……？」

最初は、急に話しかけてきたルエサーの言葉を理解できなかった。しかし、フルネームのことを思い出してみれば、ルエサーが貴族の出身であることが分かる。しかも、噂に名高い『模倣者』のフェリス……T・フロレンスの姉だというのだ。

「ルエサー軍曹から、色々とセイプ中尉の噂は聞いています。こうした空気で話そうと考えたのも、彼女ですよ」

付け加えるように、アルフォンが口を開いた。

「真似、ねえ……。正直、俺の物真似をしたところで強くはなれない、って妹に言っておきなさい。ところで、歓迎会を開いてくれそんな雰囲気じゃないが？」

「ああ、話が逸れて申し訳ない。今しがた、フリーフィンゲ奪還作戦の作戦会議が終わったところです」

そう言つて、グロウブが周辺の地図を差し出してくる。

奪還拠点ハースキャンプから数百メートル南のジャングルにある。見通しが悪いことと、足場が天候に左右されることを除けば、起伏のない普通の密林だ。装甲車や重火器の持込ができないため、四方を固めて歩兵による殲滅作戦という形を取るらしい。

「なるほど、妥当な線だが……あまり死人は出て欲しく——」
ない、と言いかけたところで、天幕に人が入ってくる。

「——失礼します。ただいま、捕虜の収監が終わりました」
ヘンゼルだ。

捕虜と聞いて、ソルフは顔をしかめた。

そして直ぐに納得する。

トラックの荷台に積んでいたのは、たぶん荷物もあつたのだろうが、その捕虜とやらが居たからだろう。

「分かった。それと、ご足労願った中尉に、何か飲み物と……野戦服とS・Aはこちらの備品から選んで貰え」

「イエッサーッ。では、中尉、こちらへ」

ヘンゼルに促され、ソルフは何か払拭し切れないものを感じながらS・Aの保管庫に向かう。

ちなみに、S・Aとは機構装甲のことである。正式にはソルジャー・アーマーという名称があるものの、正式な文書の中でも略式として使われるほど定着している。

概要のみを説明するならば、十年ほど昔、西方との戦争が勃発した当時に人的資源を保護するための装着型装甲として発案された。当初は防弾チョッキよりも強度の高い鋼鉄の鎧を身に付けるはずだったのだが、全身を守るだけの装甲はそれだけで五十キロ近い装備になってしまったわけだ。

それでは機動力に問題があり、そこで考え出されたのが機械的に稼働できるよう、改善されたもの。

中肉中背のソルフにしてみれば大抵の規格には合うのだが、最も体に馴染むものを見つけ、汗を流してから服を着替え終えたのは山間に日が沈んでからだった。

夕食を終え、日が暮れた頃には大隊の下士官達とも打ち解け、焚き火を囲みながらインスタントのコーヒーなどを飲む。ありきたりな談話ではあったものの、少しずつながら昔の感覚を思い出し始める。性格も異なり、多種多様な人間が入り混じる軍隊は、人種のサ

ラダボウルの縮図である。

民族的な差異に悩まされたこと、無意味なことから喧嘩などしたこと、今にして思えば懐かしい思い出だった。

「中尉は、ご結婚は？」

フツと、物思いに更けていたところで、ハーバーに問いかけられた。

「あ、ああ……独身だよ」

「そうなんですか？ 伝説と言われた中尉に、女性が言い寄って来ないとは思えないのですか」

そうした疑問は最もだ。いや、もちろんアプローチを掛けてきた女性も軍部に居た。

ただ、自意識過剰になることのなかったソルフは意図的に受け流していたり、時に女性の機微に疎いというのもあったためか男女の関係になることはなかった。本当に、友人のような関係を保つてきたし、中には分かり辛くて退役した後には本心を聞かされたことも間々ある。

もし、自分から恋というものをしたのであれば、現在は親友の配偶者となっているリロナ^ニエルセントぐらいのものか。

「でも、今でも気になる女性^{ひと}が、一人ぐらいいは居るんじゃないですか？」

そう問われ、ソルフは記憶の片隅に残った人物のことを思い出す。決して忘れていたわけではないが、たぶん、二度と出会うことのない女性だからこそ想い焦がれることはしていない。

「居ないと言ったら嘘になるが、願わぬ恋さ。あまり詮索しないでくれ、恥ずかしいから」

「これは失礼しました」

笑い飛ばして、誤魔化す。

焚き火を囲んだ輪の中でも笑いが漏れる。

そんなことをしていると、手に僅かながら違和感を覚える。視線を向ければ、お湯を沸かしている薬缶の口から蒸気が吹き出して手

に掛かっていた。

「熱い……」

気付いて、直ぐに手を退けた。しかし、どうやら思いの他、長く蒸してしまっていたようだ。

「大丈夫ですか？ 湧き水がこちらにありますよ。誰か、濡らしたタオルを持ってきてやってくれ」

「そうか。ああ、こういうのはしばらく水に浸けといた方が良いんだ。料理なんかしていると、熱さにも慣れちまうからなあ」

思わぬ失敗を誤魔化しつつ、ソルフは地下水の沸く水辺へ向かう。戦闘には支障もなかるうが、後でルエサーに湿布を貰っておこう。

B F 3 ・東方からの訪問者（後編）（後書き）

「どれそれ羊狼ラジオコーナー」

「忘れた方も、覚えている方も、おはこんばんは。翠色じゃないヒスイこと作者のヒスイです」

「げ、ゲストの、ルエサーです……よろしく、お願いしますッ」

「登場初っ端からゲストに呼ばれるって、主役級の扱いですよ。なのに、なんでそんな隅っこであいさつしてるんだよ？」

「い、いえ、こんなところに呼んでいただき、大変きょうひゆくー
ー恐縮です！」

「噛んだね」

「噛みました……」

「なぜ彼女が今日のゲストなのか、と聞かれると……呼ぶゲストがいなかったからだった（笑）」

「あ、そうなんですか……？ ですが、ちゃんと台本を貰ったのですが」

「一応、台本とかあるけど、今までのゲストってアドリブだから気にしないで。今回は俺の一人舞台と言うか、あまり知識のない作者に『登場人物アニメ声優（仮）』のご意見を集めたいと思っただけなんだよね」

「はあ？ 私には縁のない話ですが、口調などから読者様の一般的なイメージをお聞きたい、ということですね。ええつと、台本には（遠藤 綾さんの声でお願いします）とありますが？」

「某とある科学で出現する大宮ジェイミーさんだ。とりあえず、性格的に見てルエサーの声優は決定かな」

「わ、わかりました。頑張って真似をしてみます！」

「よろしい。それでは、ご意見、ご感想を随時お待ちしております。今回は、もう少し早く更新できるように頑張りたいと……」

B F 4 ・身を滅ぼす正義（前書き）

この物語には青少年に悪影響を及ぼすであろう描写が含まれております。決して男尊女卑の意図はありません。また、現実と虚構の区別が付く方のみ、先へお進みください。

B F 4・身を滅ぼす正義

しばらく冷たい湧き水で手を冷していると、刺すような痛みも薄らいでくる。ケロイド状に痕が残るかと思っていたが、半円形に赤くなった程度で済んでいる。後は、湿らせたハンカチを巻いて焚き火まで戻ろうとする。

その時だ、あまり聞きたくもない雑音が鼓膜を震えさせたのは。

「おい、もつと腰を振れ。まだ一時間ぐらいしか経っていないんだぞ」

「俺達を満足させねえと、終わらないぜ」

「……うう……あう」

二、三人の男が口々に言い合う声と、なにやらくぐもつた声だ。

声の聞こえてくる場所の当りをつけると、そこは農民が使い古して捨てた農具を入れる小さな納屋である。

「おらッ、濃いミルクをたっぷり呑みな」

「あ、ううッ……」

正直、納屋で何が行われているのか、想像に難くはない。換気用の木戸から覗き込めば、案の定、十代後半らしき少女へ陵辱を働いていた。

小さく溜息を吐くソルフ。

できることならば、他の部隊の遣り方にケチを付けたくはなかった。長期の作戦で、基本的な人間の欲求も溜まっではいるのだろう。それを、仲間を殺された怒り、憎悪に換えてぶつけるならばまだ見過ごせた。

けれど、他人の尊厳を踏み躪るような行為を見て見ぬフリをするなど、ソルフはそれほど人間ができていない。特に、前途ある年輩も行かぬ少女の体を貪るなど、軍人の風上にも置けない。

尋問と称した淫猥な台詞、身体検査という名目で衣服を引き千切り、拷問という名の背徳行為が行われる。

「俺が指揮官に納まっている内はそういうの禁止」

独り言など呟いて、表情を作る。

できる限り、波風を立てないように捕虜を助けるために、意地の悪い上官を演じる。

「楽しんでるみたいだな。折角だ、俺のもやらせろよ」

ノックもせず、卑下た笑みを浮かべながら納屋の扉を開く。

上官が入ってきたことに男達は僅かな驚きを見せたが、第一声のお陰か取り繕うこともせず捕虜を手放す。

麻縄で後ろ手に縛られ、梁に吊り下げられた少女が、虚ろな表情でこちらを見据える。壁の格子窓から差し込む月明かりが、少女の薄い褐色をした生まれたままの肌を照らした。髪は明るい薄茶色のボブカットで、黒い瞳に微かな生気が見て取れる。

縛られた手首が赤く擦れていることを除けば、肉体への拷問は男の欲望^ホだけに留まっているらしい。

「尋問、ご苦勞様。コーヒーでも飲んで、ゆっくり休んできてくれ。続きは、俺がしておくからよ」

正直なところ、こういうキャラは好きではない。しかし、こうでもせねば偽りの尋問が続くことになるだろう。

「分かりました。頑張って吐かせ——吐き出してください」
そう言い残して、男達は納屋を出て行った。

男達が完全に焚き火の方へ行ったのを確認し、二度目の溜息を吐く。とりあえず邪魔者は去った。

「い、ああ……おう、ああ……」

引き千切られた服の切れ端を口に詰め込まれた所為か、少女の口にする言葉は赤子も同様だ。けれど、必死に拒み、涙を溜めて懇願しているのは、直ぐに見て取れる。

ソルフは借りていた野戦服を脱ぎ、腰のサバイバルナイフを抜き放つ。

何をされるのかと怯えた少女が、必死に首を振り回す。

「安心しろ。今から外してやるから、静かに話を聞いてくれ」

麻縄を切り、バランスを崩す少女を抱きかかえてやる。手を冷していたハンカチを半分に噛み千切り、擦り切れた手に巻いてやった。

「……ッ」

「痛むか？ 内の馬鹿どもの代わりに、俺が謝る。すまない」

こうなってしまった以上、なんと謝罪しても許されることではない。自分が悪いのではないと分かっている、少しでも少女が自分の話を聞いてくれればよかった。

頭を下げている間に、少女はゆっくりとソルフから距離を取る。あまり大きくない胸元を隠し、身を屈めるようにして、鋭い視線をこちらに向けながら後退る。

「あまり気分は良くないだろうが、これで我慢してくれ」

まだ気力が余っているのを見て、安堵しながら迷彩色の野戦服を少女に投げ渡す。丈は膝ぐらいまで隠れる長さなので、ボタンを閉じておけば問題はなかる。ちゃんとした服を用意してやりたかったが、生憎ここには野戦服ぐらいしか置いていない。

少女が服を着てから、持っていたサバイバルナイフを彼女の方に滑らせる。

「武器は何もない。そうだな、俺はソルフセーフ。君は？」

安全だということをアピールして、簡単な世間話から警戒を解きほぐそうとする。もちろん、名前を聞いたのは不便だからに過ぎない。

「アーシェ (Ar she) …… クラウッド (Clawood) 。
どうして……？」

片言の東方言語で、アーシェが問いかけてくる。

南西系のアーシェが共通言語ではなく東方言語を使ったことを訝しんだものの、決して珍しことではないのでその時は差ほど気にしなかった。

どうして助けたのか。改めてそんなことを問われると、答えに悩んでしまうのがソルフの悪い癖だ。ウィンディを保護した時も、周囲に問いかけられて逃げ回ったことを思い出す。

単純に言えば、見過ごすことのできない状況だったこと。そして、現状でわざわざ捕虜を捕まえて来たことに違和感を覚えたから。

「そうだなあ。アーシェと同じ年ぐらいの息子がいてな、息子のお嫁さんに来てもらおうかとグハツ……」

冗談半分で誤魔化そうとしたところを、アーシェの投げた靴が顔面にクリーンヒットする。恩を仇で返されるとは思って居なかった。いや、元気で結構。

これだけ気丈ならば、直ぐに本題へ写っても大丈夫だろう。

「冗談は、さて置き、だ……。どうしてまた、捕虜なんかに？」

「食糧を調達に出るところを、捕まっただけ」
簡素な答えだけが返ってくる。

おおよそ、通りかかったハーバー達のジープに忍び込んだところ
で、お縄といった状況だったのだろう。

「じゃあ、その……色々とされる前に、何か聞かれなかったか？
ゲリラの構成人数とか」

「上官みたいなのが来た。同じ南西系の。あれを動かしたのか、
て」

「グロウブが……？ それに、『あれ』って何のことだ？」

「分からない。あそこを占領した直ぐに、私は捕まったから」

同じ南西系のグロウブが尋問に来るのは分かる。しかし、尋問の
主旨が作戦の前提とずれている。

捕虜から聞き出す事項として、まず敵の構成人数や武器の状況が
挙げられる。だが、それらを差し置いて訊ねたのは、『あれ』とい
う物体の使用だ。

しばし間を空けたところでアーシェが、けれど、と言葉を繋ぐ。

「危険なもの。存在を許してはいけない兵器」

それを聞いて、ソルフは眉を顰める。

重要な戦術拠点と聞かされていた施設が、よもや兵器の隠し場所
などとは思わなかった。もちろん、アーシェがソルフの人の良さに
付け込んだ狂言である可能性も否定できない。

もう少し詳しい話を聞きたいところだが、長々と話している時間はない。夜も更けた今、別の誰かが見回りに来ないとも限らないのだ。

「とりあえず、君をここから逃がす。土地勘はあるだろうから、西に逃げてくれたら後は俺が何とかしておく」

鼻頭を押さえて救出に来た正義というのも見つとも無いが、手間が省けて良かったとも思う。

「後で、滝のところで合流しよう。君には聞きたいことが色々ある。さあ、行け」

ジャングルの西にある河川を合流地点に決め、アーシエを納屋から逃がす。

「逃げた！ 捕虜が、逃げたぞッ！」

アーシエが木々に姿を隠したところで、焚き火を囲んでいた奴らに叫んだ。南に逃げたことをアピールしながら、大袈裟に喚き散らす。

無論、僅かながら捕虜逃亡の責任を負うだろうが、味方というカテゴリーから外れるつもりのソルフには関係のないことだった。

B F 4・身を滅ぼす正義（後書き）

「どれそれ羊狼ラジオコーナー」

「……あの」

「話しかけないでくれます？ 作者ことヒスイさんが、こんな人間だったなんて思いませんでした」

「ローナさん……私とて、本意ではないのですよ。もしかして、最終話まで出番がないことを怒っていらっしゃる？」

——以下放送事故——

「ひ、酷い目にあった……。まあ、注意書きは書いたから、運営に睨まれることはないだろう。ちなみに、この回を読まなかった読者方のために、次回にはあらずじを書いておきますのでご安心ください」

B F 5 . すれ違いハプニング

その日は、日曜日。

一般的に多くに社会人や学生が休日とする日だ。故に、商店街が込み合っているのも理解はできる。ならば、なぜ、こんな日に自分は商店街なんぞで一人寂しく佇んでいなければならないのか。

答えは単純明快。

待ち合わせの場所に、待ち合わせをする人物が現れないからである。

「遅い……」

昼の二時半を過ぎようとしているのに、待ち合わせ場所である商店街の噴水前に彼らは姿を現さない。目立つという理由からいつもの深緑のセミロングは黒く染め、雑踏を細い瞳孔で睨みつけるフィルティアが、ポツリと怒りを吐き捨てた。

その呟きに、いかにもロックバンド系と言えそうな男や、大学生と言った風体の青年が振り返る。

黒いダッフルコートに身を包んでいるため、寒さこそ感じないものの、三十分の遅刻となると流石に辟易する。どういうわけか、仕事の上で闇に潜んでいることは苦にならぬのに、人混みにおいては異様なほど身を揉まねばならない。

「何を、そんなにカリカリしてるんだ？」

「……ッ」

気を張っていた所為か、唐突に背後から話しかけられて肩を震えさせるフィルティア。

話しかけてきたのは、黒のカットソーに茶色い革のジャケットを羽織った、二十代ぐらいの男だった。頭にワッチ帽、ところどころにシルバーアクセサリを携えた姿は、いかにもといったロックバンド系を彷彿させる。

しかし、帽子に隠れた髪のウェーブと、実年齢よりも老けた髭面

を見て、ようやくその男がオスカルであることに気付く。そう言えば、こんな人物が自分の立ち位置から百二十度ほどの位置で煙草を吸っていた。

「ははあ、普段と違うから近くに居ても気付かなかったわけか。つてことは、全員、同じ穴の貉つてことか」

オスカルがそう言う間に、今度は逆方向から見慣れない人物が現れる。

鶯色の瞳に丸渕の眼鏡を被せ、灰色の髪をキャスケットに隠した青年だ。その加えてセミコートに肩掛けのバックという井出たちのためか、普通の大学生に見えてしまう。

「ウイ、ウインディ……なの？」

「えッ？ やっぱり、お、おかしかったですか？ あまり出かけるための服を用意していなかったので、父のお古を借りてきてしまったんですが……」

戸惑うウインディを余所に、フィルティアの疑問は別の方向に向いていた。

「眼鏡なんて、していたっけ？ もしかして、普段はコンタクトレンズでも入れているの？」

「ああ、これは、こつちに来るまでに、商店街の案内図をデータリングしたものらしくて、買ってみたんです」

どうやら、眼鏡の方は観光用の便利グッズとのことらしい。普段から家政婦に任せきりで、買い物など出かけないフィルティアは現存の利便性に思わず感嘆の息を漏らしてしまう。

「これ、『オブジェクス』でデータの内容も書き換えられるんですよ」

「へえ、今度色々を入れてみようぜ。俺が裏で仕入れたビデオとか、よ」

「流石にプロテクトが掛つてると思いますよ……。それと、変なことを言つてローナにどやされても知りませんよ」

なにやら、和気藹々と会話を始める二人の少年。

先刻と打って変わって、嘆息を吐きながら二人の様子を眺めつつ、微かな頭の痛みに額を押さえる。

「そろそろ、行きましよう。遅くなったら、パーティーに間に合わないでしょ」

最後の最後まで渋っていた自分が仕切るのもなんだが、今日の目的はローナの誕生日パーティーに用意するプレゼントの買い付けだった。

チームメンバーというだけであって、別に誕生日パーティーに参加する義理などなかったのだ。が、オスカルが強く推したためにこうならざるを得なかった。

オスカル曰く――。

「誰かの誕生日に招かれるなんて初めてだからよ」
寂しい奴だと思う。

ウィンディ曰く――。

「僕の誕生日は、父と軍部の知り合い方が祝ってくれますから」
自分の出生など気にしないお気楽な性格らしい。

それを言うフィルティアは、祝われるだけ面倒なのでパーティーなどしないし、生まれてこの方祝ってもらったことさえない。

こうして三人は商店街に繰り出したわけだが、事件は帰り際に起きる。

プレゼントを選ぶこと自体、ローナが自分専用の工具キットを欲しがっていたのをウィンディが思い出し、滞りなく買い物を終えた。その後は、しばらく商店街の散策などをしてから、トレイン・ターミナルに到着したのである。

「良かったですね。最後の一個が、在庫で残ってた」

何故か工具キットの売れ行きが良く、ギリギリのところでは最後の一つを手に入れて意気揚々とターミナルを歩くウィンディ。

それから、こういう数奇な擦れ違いか、とんでもないハプニングがあった。

「ちよいと、小便してくるわ」

と、ターミナルに着いてからオスカルがホームを離れる。

たぶん、その時に、黒地に黄色い星を散りばめた包装のプレゼントを、背中合わせに置かれたベンチに置いたのだらう。三人が乗る予定のエアラインが到着する路線とは、反対側に。

「僕も電車の時間を確かめてきます」

そう言って、ウインディも立ち位置を離れてしまった。

そこへ、偶然にも同じ包装の荷物を持った男が通りかかり、その荷物をフィルティア達が立った側のベンチに置く。そのまま、電話を掛けにその場を離れた。

フィルティアの犯した愚行と言えば、通りすがりの男が置いていった荷物をプレゼントだと思って、

「置きっぱなしなんて危ないでしょ……」

手に取ったことだ。工具セットなど、一般の泥棒に価値があるものではないはずなのに。そこで、家の手伝いをしてくれている家政婦にパーティーへ参加することを伝えていなかったのを思い出し、荷物を持ったまま電話を掛けにその場を離れる。

丁度その時に、オスカルが手洗いから戻って自分の置いた荷物を反対側のベンチに移し変える。

「あーや、誰もいねえや……。うん？　しまった！」

ただ、そこでトイレにアクセサリを置いてきてしまったことに気付き、また無用心にその場を離れた。

今度は、電話を終えた男がプレゼントと自分の荷物を勘違いして持っていてしまったのだ。こうなると、後は間違えに気付かず到着したエアラインに乗り込み、岐路に着くという馬鹿げた失敗をしたわけである。

男は三人と反対方向へ向かうエアラインに乗り、どこかへ向かってしまった。

しかし、偶然にもプレゼントではないことに気付けたのは僥倖と言えよう。

「うわッ」

「おっと、大丈夫か？」

エアラインが停車する慣性法則で、ウィンディが体勢を崩した際に包装に指を引っ掛けて破いてしまった。

「はて、こんな入れ物だったか？」

工具キットは青いケースに入っているはずだが、包装の中身は銀色のアタッシューケースだった。

そこで直ぐに、プレゼントを取り違えたことに気付く。

しかし、ウィンディが手に入れていた眼鏡の便利グッズが、ここで役に立つ。

「そう言えば、この眼鏡、自分達が買った物のIDを入力するとセンサーで場所を教えてくれるんです。紛失した時なんかには、探す手間を省く——」

「——御託は良いから、さっさと探しなさいッ」

「は、はいッ！」

そんなこんなで、眼鏡が示したビーコンを追ってたどり着いたのが、そこだった。

第三西方独立地区。

時間は、五時を過ぎようとしていた。

B F 5 すれ違いハプニング（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。

今回はラジオコーナーなしで行かせていただきます。

この回、書いてて一番微妙でした。地の文が説明的だし、ご都合主義丸出しに思える……。

戦闘シーンとかグロシーンから脱出すると、急に書きにくくなってしまうのは私の悪いところかもしれません。続きをお待ちの皆様、大変申し訳ありませんが切にご容赦ください。

それでは、またお会いできることをお待ちしております。

B F 6 ・この森はまだ深く

先刻までの慌しさ^{さつき}が、潮が引くように消え去った後、ソルフは一人でベースキャンプを散策する。

捕虜を逃がしたことに關してのお咎めは、何故かなかった。疑問にこそ思うが、現在の大隊指揮権はソルフにあるため、最初に捕虜——アーシェの見張りをしていた男達が説教を受けているのだろう。少し申し訳なくも思うが、悪いのは男達なので庇うつもりはない。「おっと、ここが治療場か」

散策していたソルフが、薬品のおかれていた天幕を見つける。目的は、火傷用の湿布だ。ほとんど痛みは引いたとは言え、小さな怪我がこの先の戦いにどんな影響を及ぼすかを考えると、放つては置けなかった。

天幕の広さは、仕官用のものとそれほど変わらず、机の上には包帯やら衣類といった荷物が詰まれている。どうやら、医療部隊のメンバーは片付けが苦手のようなのだ。

それはそれとして、意味不明なラベルの貼られた薬品が並んだ、スチール棚を物色して湿布を探すものの何故か見当たらない。

薬品には疎いソルフでも、流石に日常で使用している傷薬や湿布の見分けは付く。それでも、スチール棚に並んだ薬品は聞き覚えのないものばかりだ。

「暗い所為か？ でも、この状況はあまり見せられないかッ——」
ライトをつけようかと思案した時、唐突に背後から懐中電灯の明かりが当てられる。

「——誰ですかッ？ 棚の薬品類は、衛生部隊の許可を得てからと言つてある……あれ？ ソルフさんじゃないですか。どうしたんですか、こんなところで？」

「えッ……ああ、ルエサー軍曹か。驚かさないでくれよ」

誰かと思えば、ルエサーが物音に気付いてやってきただけだった。

「す、すみませんッ。ただ、ここにある薬品は、容量によっては劇薬になるものばかりですので、許可なく触らないでいただきたいんです」

「そうなのか？ すまん、ちょっと火傷用の湿布を貰いたかったんだ。勝手に物色したことは謝るよ」

「いえ、こちらこそいきなり声を掛けて申し訳ありません。えっと、湿布でしたらこちらの救急箱に入っています。普段から使う医薬品は、こうして小分けしてから各部隊の方々に渡しているんですよ」

そう言つて、机の隅に隠れていた救急箱を取り出してくる。

そのまま受け取るうとするソルフだが、何を言つてもなくルエサーが救急箱から取り出した湿布を広げ始める。

一人でも湿布ぐらい張れる、と主張しようとしたものの、どこか譲らない意図を秘めたルエサーの目を見て諦める。

「それにしても、災難でしたね」

「えッ？」

突然、話を振られて困惑するソルフ。

「捕虜に逃げられてしまった、とお聞きしました。たぶん……その、もう少し私やエミーナ曹長が気をつけていれば、こんなことをさせる必要もなかったのでしょうか」

何が言いたいのか些か疑問だが、女性の捕虜に対しての意識が甘かったことを悔やんでいるらしい。

気を使わせては悪いと思い、誤魔化そうとする。

「俺も、小娘だと油断して縄を解いたのが悪かつ——」

しかし、言葉途中で遮られてしまう。

「——いえ、そうではなくてですね。逃がしたのは、事故ではなく故意なんですよ？」

「なんで、そう思うんだ？」

不意打ち紛いに真意を問われ、ソルフは必死に戸惑いを隠そうとした。が、ルエサーはお見通しだ、と言わんばかりに言葉を続ける。「隠さなくても良いですよ。私は、妹みたいに誰かの技術を真似る

ことはできません。けれど、言動の端々から他人の真意を読み取る能力、と言うのでしょうか？ そうした才能があるみたいで、こうやって体に触っていたりすると良く分かってしまっんです」

ルエサーの言葉を聞いて、ソルフは驚いたような、怪訝そうな表情を作る。

西方の伝承に伝わる、人の心を読む猿の話聞いたことがある。それほどでは無いにせよ、読心術を身に付けているらしい。たぶん、ルエサー達の家系は、様々な人体の変動に精通した才能を持ち合わせているのだらう。

隠し事はできないと察して、ソルフは苦笑いを浮かべてみせる。

「参ったな。軍人を辞めたけど、軍法会議って掛けられるものなのかねえ」

「誰にも言いませんから、安心してください。それと、もし行くというのならこれを」

「なんだ、これは？」

ルエサーが小瓶に入った錠剤を渡してくる。

「まあ、説明書は中に入っていますので、彼女に渡してくれたらわかります」

なにやら説明し辛いのか、言葉を濁してしまう。

深くは突っ込まず、ソルフは小瓶を受け取る。たぶん、彼女というのはアーシエのことを差しているのだらう。まさかアーシエの後を追いかけることさえ感づかれていては、呆れるか感心するかのどちらかだ。

ソルフは、ルエサーから簡易の医療キットも受け取って、お礼を言ってから天幕を後にする。

「あ、もしベースキャンプを抜け出すのなら、北の方から迂回すると見張りが少ないですよ」

天幕を去るソルフの背中に、ルエサーの声が届く。ソルフはその声に片手を上げて、簡易的な謝意と別れを示した。

正直、できることならルエサー達と敵対はしたくなかった。その

為にも、今回の奪還作戦の裏に何が隠されているのかを知らなければならぬ。

ソルフは幾らかの装備をリュックサックに詰め込み、昼間に選んだS・Aを拝借してベースキャンプを抜け出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2237o/>

羊の鎧を着た狼の戦場？

2011年10月25日11時03分発行